

2) レオナルド・フジタ展『小さな職人 たち』からの報告

Study on Léonard Foujita exhibition. "The
children are dressed as artisans"

池園歯科研究会 ○湯浅 高行
藤野 瑠男
日本歯科大学 屋代 正幸

Takayuki Yuasa, Yoshio Fujino, Ikezono dental
research group
Masayuki Yashiro, The Nippon Dental
University

フジタツグハルが初めてパリの地を踏んだのは
1913 年。困難にもめげず歯をくいしばり、彼は
「乳白色の肌」の裸婦像で画家として栄冠を手に入
れた。職人肌の画家フジタは、自分を育ててく
れたこの町の底辺で手仕事にいそしむ人々に格別
のいとおしさを感じていたことは想像に難くない。

戦後、新たにパリに住まうことになった晩年の
1958 年秋から、フジタはパリの街で様々な仕事に
従事する子どもたちの姿を数多く描くようになる。
そのどの作品も 15 cm 四方のかわいらしい
正方形のファイバーボード（木の繊維を合成樹脂
で固めたもの）に油彩で描かれ、それぞれの絵に
フランス語で職業名が書き込まれているのも特徴
である。その翌年の春にかけて断続的に制作され
たこれら一連の作品は『小さな職人たち』と呼ば
れるように、左官や指物師、あるいは床屋といっ
た、手仕事に携わるいわゆる職人系の人たちが重
要なテーマとなっている。

描かれている子どもたちは、みな真剣に仕事に
取り組んではいるものの、どこことなくぎこちなく
ユーモアがあり、フジタの空想による子どもなら
ではの世界が展開されている。またそこには、パ
リそしてフランスに対するフジタの愛が凝縮され
ていると同時に、「作家はアルティスト（芸術家）
である前に、アルティザン（職人）でなければなら
ない」と語ったフジタという画家の、職人仕事
に対する敬意がこめられているといえるようだ。

演者らは、この一連の小作品群の中に、「歯医者」
というタイトルの絵があることに着目した。この
絵は、フジタの眼で当時の歯科医院の一室を再現

して、そこに歯の痛む子どもの患者と子どもの歯
科医師が的確に描かれている。

この「歯医者」の絵とこれら一連の作品群から、
知り得ることをまとめてみた。

〔まとめ〕

1. 小さな職人たちの作品は、1958 年～1960 年
ころまで、短期間に集中して制作された。
2. 作品の特徴は、15 cm 四方の正方形のファイ
バーボードに直接油彩で描かれている。
3. 作品の題材は、手仕事に携わる職人系の人た
ち（尊敬の念）がテーマである。
4. 歯医者作品については、当時のパリの歯科
医院のオフィスがていねいに描写されてい
て、そこに、2 人の子どもたちが歯医者ごっ
こをしている様子が描かれている。
5. これらの作品は、フジタのアトリエの壁や扉
にタイルのようにはりつけて、自分自身でな
がめて楽しんでいた。
6. フジタ独自の子どもへむけるまなざしと特別
な思い。

以上、紹介と報告まで。

3) 中原中也『三等車の中（スケッチ）』 に登場する女性について

A woman in "Santousyanonaka" written by
Nakahara Chuya

鶴見大学歯学部 佐藤 恭道

Yasumichi Sato, Tsurumi University School of
Dental Medicine

中原中也の小品で昭和 8 年 4 月に作成された
『三等車の中（スケッチ）』の一文について考察し
たので報告する。

中原中也（明治 40 年—昭和 12 年）は、詩集『山
羊の歌』『在りし日の歌』など数多くの作品を発表、
またアルチュール・ランボウやアンドレ・ジード
などの訳詩を手がけた詩人、翻訳家である。

作者は東京から山口に帰省するために夜行列車
に乗っている。窓の外は真っ暗で、混んだ車中
には様々な人が居合わせている。

そして『…その赤ん坊の真ん前に腰掛けてゐる
のは女の先生で、尤も先生だといふことは翌朝に
なって分かったので、一寸見た所では薬専か歯科

医専の生徒だらうと思はれた。銘仙の袴に金紗の羽織を着、兎の毛で縁をとったオールドローズの繻子の肩掛に寒々とくるまり、海老茶の袴を胸高く穿いてゐる。鼻翼の所はおしろいが剥落ちてゐて、一寸突いたらビリビリト破けそうな感じがする。…』と乗り合わせたある女性を観察している。

しかし中也はこの女性を何故『薬専か歯科医専の生徒』だと思ったのであろうか。

まずこの女性の服装から考えてみる。明治30年頃から海老茶式部と呼ばれる、海老茶色の女袴を着けたスタイルが女学生に定着していった。しかし昭和8年当時、女学校の制服は和服から洋服に変わりつつあった。

東洋女子歯科医専が大正8年に、東京女子医学専門学校では大正9年に洋服が制服に制定されている。その後10年が経っていても一般的な海老茶式部のイメージは色濃かったのだろう。特にこの女性の服装は一般的な女学生にしては、羽織や肩掛が少し高価にも思える。そこで薬専や歯科医専の生徒だと思ったのかもしれない。

次に中原中也の作品から考えてみる。中也の詩には『歯ブラシを買ってみた（旅）』『舌があれました（倦怠者の持つ意志）』『歯槽膿漏たのもしや（幻想）』『歯医者女の房なぞといふものが、つまらないのだ（自然といふものは、つまらなくはない）』『美しい、前歯一本欠け落ちた（いちじくの葉）』など歯科的な事象が含まれているものが認められる。

何となく口の中がおかしい。そこで歯ブラシを購入する。気になる部分を舌で触れるので舌が荒れる。歯槽膿漏の様なので歯科を受診する。しかし先生の奥さんと折が合わず結局歯を抜くはめになってしまった。この時期に中也の口腔にはこんな変化があったのではないかと推察できる。

以上から作品の中の女性はその服装のイメージと中也自身の口腔の変化が相まって、最初歯科医専の生徒と見られてしまったのではないかと考えられた。

なお本文のテキストは角川書店発行『新編中原中也全集』を用いた。

4) 西東三鬼の学生時代の翻訳詩とその周辺について

Sanki Saito, one of the most celebrated Haiku poets and a dentist, translated two symbolic European poems into Japanese during his college days

○北野 元生
樋口 輝雄

Motoo Kitano and Teruo Higuchi

『富士見』の創刊号（大正十四年三月発行《非賣品》）を手にしている。社団法人日本歯科醫學専門學校學生會より出版されたものである。明治四十二年（1909年）から現在にいたるまで、東京都千代田区（區）富士見町の一角にあったことから、地名に因んで『富士見』という誌名が付けられたのであろう。

大正十四年（1925年）は、西東三鬼がこの日本歯科醫學専門學校をまさに卒業した年であり、従って、この冊子は西東三鬼が卒業とほぼ同時に発行されたものである。この冊子の八十九頁から九十頁にかけて、「譯詩 四年 齋藤敬直」の表題と翻訳者の名前とともに、フランスの詩一篇とイギリスの詩一篇が掲載されている。もちろん齋藤敬直とは三鬼の本名であり、四年とは彼が同校の四年生であることを示している。三鬼が翻訳したフランス語とイギリス語の二篇の詩を、『富士見』誌に投稿したものであろう。

この二つの詩は三鬼の研究者にとっても、俳句界にとっても極めて貴重な資料であると思われるので、『富士見』に掲載された通りにルビも含めて報告しておきたい。掲載された通りと言っても、現在のワープロの機能には限界もあり、漢字の表記については、一部旧漢字の表記に少々齟齬を生じているが、あらかじめ了解してほしい。

三鬼の二篇の訳詩のそれぞれのあとに、最小限の〔註〕をつけた。

譯 詩 四年 齋藤敬直

アルチュール・ラムボーに與ふ
フェルナン・グレエグ